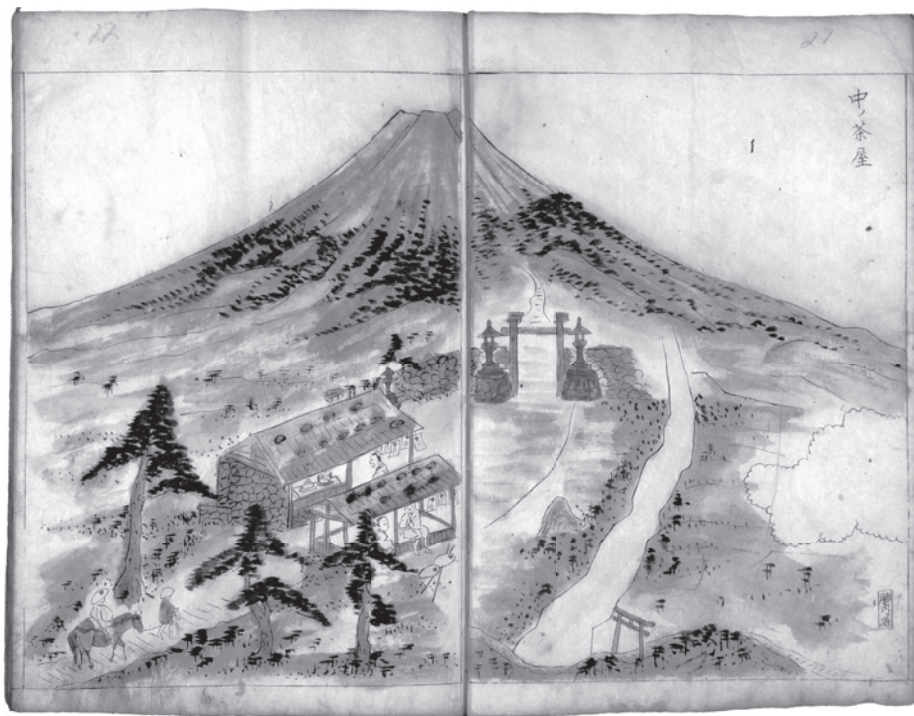
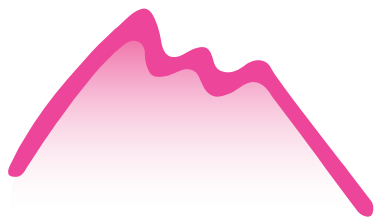




■中ノ茶屋/富士山明細図

富士山御師外川家に泊まった人々(後-1)

-『富士の道の記』の紹介-

菊池 邦彦(外川家調査員/東京都立航空工業高等専門学校教授)

博物館 Report

御胎内から二合目へ

富士山麓の熔岩洞窟を訪れて「母の胎内」を体験した一行は、いよいよ富士山頂に向かって登山を開始します。日付は天保14年(1843)文月(陰暦7月)13日[太陽暦では8月8日]のことです。作者たち一行は、

六根を 清めなをせる 御胎内
産れかわりし 心地こそすれ

と詠みつつ、御胎内近くの茶屋から空掘りまで戻ります。

あたりは、「秋草花」でいっぱい
あきのくさばな

花野から むまれ出たる
富士の嶺

妻手(右手)には富士山の清々しい姿が、雲霧もなくそびえ立っています。さらに五、六丁(1丁=109m)行くと、馬たちが草をはみつつ待っていました。作者たちは、ここからまた馬にまたがって、中の茶屋に至ります。ここは吉田から登ってくる人々の往来の地で、道者の笠や行衣の白さが、森の緑の中に際立っています。作者は「吉田に鶯の居りつか」と表現しています。

間もなく、御馬返しです。ここからは、馬では登れません。吉田から原道三里の爪先登りでやってきましたが、この先の若松屋という茶屋でひと休みし、

馬士に馬の駄賃や酒料(心付け)を渡しました。

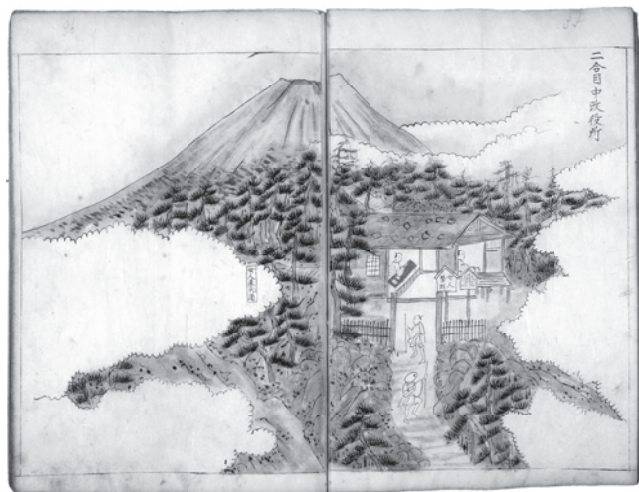
「こわありがたし、きげんよく登山せませ、我ら八是より帰りて盆仕度」(です)、と言いつつ、彼らは馬を引き連れて帰ります。そうか、今日はお盆だなア、作者の感興も旅の空では一入です。

かり馬を 御馬かへしや
盆のくれ

荷物(荷物)は案内の強力に背負わせて、身は軽く出発です。茅野の坂道を七、八丁行くと一合目で、ここからは木立の中を登ります。ここには、登山の改役所があり、案内の者[強力]が御

師の切手を渡します(切手とは、この人たちはすでに[吉田の御師外川家で]山役銭を払いましたよ、という領収証、あるいは証明書です)。今でいえば入山料といえましょうが、[それ以外にも]下浅間宮の修復勸化(寺社の修理のための寄付金)として、12穴を納めます(当時の寛永通宝には四角い穴が開いていたので、一文銭12枚をこのように表現したのです、ここでは、富士山頂の浅間神社を上浅間ととらえ、それに対し上吉田の浅間神社[現在の北口本宮富士浅間神社]のことを下浅間宮とっているようです)。

二合目役場から五合目へ



■二合目中改所/富士山明細図

この上に二合目の役場があります。「女人、是までハ登るとかや」、すなわち、女性の登山者はここまでで、ここから上は女人禁制です。それを改める役場です。少し登ると金剛杖の売場で、人々と共に作者も64穴(64文)出して杖を求めました。ここから先、左右に曲がる山道を、この杖を頼りに登ります。しばし、作者の叙述から五合目に至る風景を味わってみてください。(史料1)

私個人としては、四合目にある御座石浅間などの様子も知りたいところですが、作者たち

は、「掛念仏」(この作者は2か所ともかけ「ねぶつ」とルビを振っています)を唱えながら三合目・四合目と軽快に登ってゆき、五合目の茶屋に着いたようです。かけ念仏というのは、富士講の人々が、タツミチを通して御師の家に入る際や登山の道中、あるいはサカ迎えをうける帰宅の際など、何かにつけて唱える「念仏」です。[私事です、昨年夏、京都聖護院の方々の天上ヶ岳(大阪府箕面市)登拝に同行させていただきました。その際、急な山道を登る修験の装束をした老若男女の信徒

「登山道の左右を見渡すと」「さるかせの樹々につるゝハしらが昆布とも思われ、シヤクナギの花ハ今を盛りに咲ミだし、木々の梢は風荒に朽折、又大木の折て登り行道に横たわるハなかばより切て道をひらき、雪解に土石を落して道を失ひぬるハ廻り道を捕理してあり、晴天にあるかと思ひバ、今の間に雲きりかゝり、連立同行の形を見うしない、かけ念仏の声に其有事をしり、雲に乗りかと思ひバ、又はれワたりて、其あがきを見る、霧の香に身心ぬれてひやゝかなれども、登るあがきに汗を流して、掛念仏の声を力に三合目・四合目をいきもつきあへず登り、五合目の茶屋にこそ着にける、此所ハ是御山の半腹にて、麓立の登山の人々ハ中喰の場なりけれバ、休らへ給ひと案内のいふにまかせて、わらじのまゝ、安座しつゝ、汗ふき、いきつぎながら、茶など吞て有けれバ、御師に同宿の倉の同行も爰に休めり、早き過ぎの礼をのべ」(あいます。)

■史料1

の人々を励ますために、聖護院の修験の方々が、登山中「サングサンゲ、ロッコンショジョー〔懺悔懺悔、六根清浄〕と繰り返しかけ声を掛けておられたのが印象的でした。林間に響く澄んだ力強い声に、私たちも唱和して、自らを奮い立たせました。富士講のかけ念仏では「サングサンゲ」の部分があったかどうかは分かりませんが、先の御胎内の所の歌にもあるよ

うに、「六根清浄」は唱えていたと思われます。]

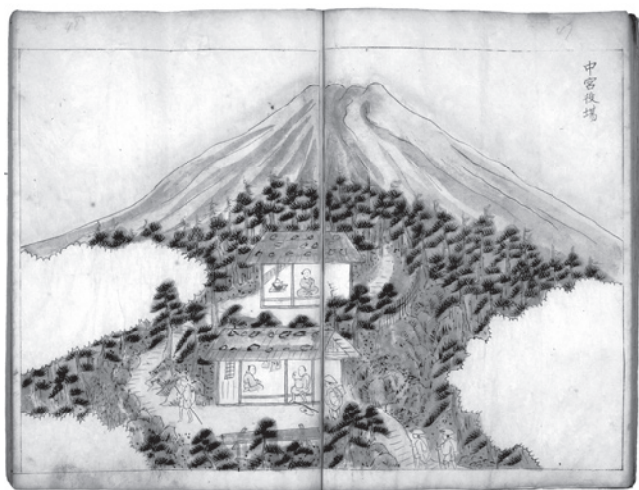
登山道の脇には、樹皮からシラガ昆布のようにぶら下がる「サルオガセ」、今を盛りに咲き誇るシヤクナギの花などが見られ、周辺の植生や倒木、雪解流によって切断された登山道の様子は、現在と全く変わらない状態です。[多少オーバーな表現かもしれませんが]雲が霧か分からないものが深く立ちこめ、

時には前後の同行の人々の姿を見失うほどであった、と作者は書いています。

中腹の五合目の茶屋は、麓を出立した道者たちの中食の場です。人々はワラジを履いたままくつろいで座り、お茶を飲んだり汗を拭うなどしたようです。昨日、御師外川家宅で同宿であった富士講の倉の人々とも再会し、挨拶を交わしています。倉の一行は、作者たちが着いた

日に、先に御胎内見物を済ませていましたので、大人数(14、5人)の団体でも、作者たちよりも先に五合目に着いていたものと思われます。一晚だけとはいえ、同宿のよしみで挨拶を交わしたのです。倉は前回も申しましたように、上総国〔千葉県〕木更津地方などに広がる御師外川家を支える重要な富士講のグループの一つでした。

五合目の茶屋で武士と酒を酌み交わす



■中宮役場/富士山明細図

「又此茶屋にも酒あれど、もて来し瓢の焼酎に山気を払ひて居けるに、かたわらに武士の二人り休らひ居て、五合徳利を差向にてとりやりして呑居しが、先達合を頼みたしと猪口を我へさしければ、こわありかたしといたゞきて、一猪口のおさへ重ね合、三度・四たびのおさへのと、五合徳利をこるりとなせば、我らが瓢の軽くならぬぞたのもしけり」

■史料2

この五合目で、作者に一つの転機が訪れます。二人の武士と知り合いになったのです。

俳句や和歌を自在に詠み、闊達な文章を書き、なかなかの文化人である『富士の道の記』の作者ですが、お酒にはめっぽう目がなかったようです。俄然親しみがわきますね。

はじめは自分の持ってきた焼酎をちびちびと飲んでいたようですが、近くで五合徳利の酒を酌み交わしていた二人の武士から、「先達、合を頼みたい」と猪口をすすめられると、「こわありかたし」といわず杯を重ねています。「合」というのは遊里で発達した習慣で、2人がサシで飲んでる時に第三者が代わりて杯を受けることです。

武士と町人という、教科書では、江戸時代は士農工商の固定的な身分制で、武士は切り捨て御免の特権を持っていた怖い存在に描かれますが、実際はどうだったのでしょうか。

富士山五合目の茶屋で、武士

と〔作者は「隠商」と自称していますので、商人＝町人と思われる〕作者が、何のこだわりもなく同席し盃を重ねているのです。むしろ、先達を頼みたい武士たちは、作者よりも下手に出ているようです。

厳しい身分制も、日本の社会ではタテマエとホンネを考えなければなりませんし、身分制自体も、江戸時代の後期になると大分変質して来ています。皆さんご存知の勝海舟の家は、祖父が旗本株を買ったので、武士身分となれたことはよく知られています。もしそうでなければ、西郷隆盛と勝海舟の薩摩藩邸での江戸無血開城の会談もなかったかもしれないのです。厳しさといひ加減さを併せ持つのが、江戸時代の身分制のようです〔また、この「武士」身分についても、後にあきらかになります〕。

武士に先達を頼まれる

ところが、この酒のすすめには伏線があったようです。酒の後の飯を作者にすすめる武士の雇った強力が、急に小御嶽への先達をつとめて欲しいと頼むのです。小御嶽へ武士たちの先達をしてくれれば、とても助かるというのです。作者の連れてくる強力も同様に口添えし、そうしてくだされば、これから強力二人ですぐに登り、「六合目に待てあらん〔六合目で皆さんをお待ちして居ります〕』というのです。また、当の武士たち

も「先達、連て廻りて給へ〔先達、どうか俺たちを連れ廻して下され〕』と懇願します〔詳しい理由は分かりませんが、どうもこの二人の武士、行動が遅い上に酒好きで、休憩の度に酒を注文しています。重い荷物を持たされた強力が、もてあましていたのではないのでしょうか。また、重い荷物を担ぐ強力にとっても、五合目の茶屋からいったん小御嶽に寄り、また戻って六合目に向かうよりも、直接六合目に登った方が、断然楽です〕。

「我、先達にあらされど、行衣の様躰・なりふりハ、夫とも思ひ給われど、こたびて二度の登山にて、山のわけも不案内、されども初山にあらざれば、少しく案内もしてあり、又先程のくみ給へる酒の御恩も他性（生）のいにし、しるとしらぬをゆるし給はゞ、行衣の御判をかたに着て、先達をやいたさんと、先達にあらねど夫と頼れて呑込んで行五合目の酒といへければ、ミなぐどつと笑へけり」。

■史料3

これに対し、(史料3)〔作者は〕自分は先達〔となれるほどの経験も〕ないけれど、行衣だけは先達並〔に貫禄のあるお身抜きやオユルシを貼り付けてあり〕、格好だけはそのように見られるかもしれませんが、〔実際は〕今回で二度目の富士登山で、御山の様子も不案内です。けれど初めてではないので、少しはご案内できる知ったところもあります。また、先程酌み交わした酒の恩もあり、〔酒酌み交わすも〕他生の縁です。知

る所・知らぬ所があるのをお許しいただければ、行衣の判〔などが先達並であること〕にかけて、先達をさせていただきましよう。

先達ではないけれど、先達を頼まれて、五合目の酒〔と、酒と一緒に断る言葉〕を呑み込んで、〔先達として富士山に登って〕ゆく こう詠むと、廻りのみんなが、どっと笑ったことでした。作者はなかなかユーモアのある人だったんですね。



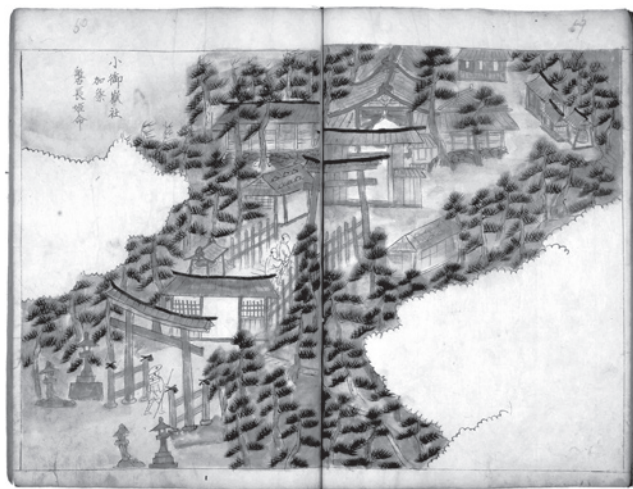
■右袖に外川義直のオユルシが貼られた行衣

小御嶽を訪れる

「いざ登らんと金剛杖をつき立て、都合八人もの共に、少し登れハミギリ手に、小御嶽石尊大権現と、額かけて有鳥居より、御山の半腹登り下り、砂場の小道をたどり行、はや此辺ハ木立なく、少しき木さへも風の為に、伸る事なくちぎまりて、右と左りへはびこるあり、又根元よりぬけかゝりし有て、しばし行バ、弓手の小崖に清水湧出、三、四尺計りのたら／＼と小龍ありて、其壺は石にて井のごとく角まりて、御泉瀧と建石に印して有、いざや此水乞んと、手にくみて咽をうるをし、しばしたゞずみいきつぎて、東都講より納りし鳥居を越へ、石坂登り高くもあらぬ木立を過れば、石尊のはやちかからん、半鐘の聞へければ、

打ならず 石尊宮の半鐘ハ 是富士がねの 央なるらん
と言つゝ右りの方北に向ひバ石尊宮の御山にて、仁王門を入、左りのかた水屋のごとく角なる石に覆をして御供水とあり、少し／＼のぼりて社を拝し、右へ廻りて御札を求め、鈴・錫杖・斧・まさかり・鍬・鎌、あるひは下駄などの大そうにして、手にてやうやくうごかしてのミ見る計り、庫裏やうの所にハ井戸もあり」

■史料4



■小御岳社/富士山明細図

作者と佐野の5人の富士講の人々、そして2人の武士、この8人の混成パーティーは、金剛杖を突き立てて、いざ小御嶽へと歩を進めます。(史料4) 少し登ると、「小御嶽石尊大権現」と額を掲げた鳥居が右手にあらわれ、そこから砂地の小道をたどります。この辺は風が強く、わずかな木立も強風に萎縮し、根も抜けそうな状態です。しばらく行くと、弓手(左)に清水が湧き出ている「御泉瀧」と刻ま

れた建石の場所が有ります〔この建石は今も建っています〕。小龍の水を掌にうけて喉を潤し、しばし休みました〔この場所は今でもあります〕。

ここから更に、江戸の講が奉納した鳥居を過ぎ、石坂を登って高くない木立を過ぎると、石尊宮が近いのでしょうか、半鐘の音が聞こえます。

打ならず石尊宮の半鐘は、富士山の中腹であることをあらわしているのだろうか〔半鐘の半

と、富士山中腹五合目のなかばという意味を掛けているようです〕、と詠んでみますと、右手にあたる北の方角に石尊宮があります。

本誌先号から本号に連載さ

れている奥脇和男「山頂の鐘」(前)(後)は、富士山頂上の鐘に注目した興味深い論考ですが、私たちが読んでいるこの記録には、小御嶽にも半鐘があって、人々が盛んに打ち鳴らして

いたことが記されており、鐘を打ち鳴らす場所の存在が裏付けられました。

仁王門をくぐり、水屋のように四角い石組みの上に覆いをした「御供水」から少し登ると、

社殿が有って、そこで御札を求めます。〔現在も見られるような〕巨大な鈴・錫杖や斧・まさかり・鍬・鎌・下駄などが奉納されています。庫裏のような所には、井戸もありました。

小御嶽から七合五勺へ

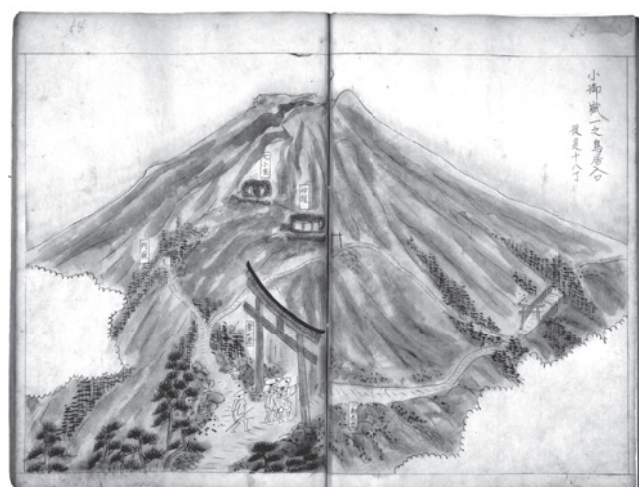
「しばらく休らひて、又元の道へ半里ほど戻り、登山下山乃ワかされより、右の砂道しばし登り、少しき木立を過てまた砂道をのぼり、五合五勺目の砂はたぎの茶屋へいづ、爰にも石尊宮の鳥居有、此所七合五勺目より下向走りの其はしなり、夫より五勺を登りて六合目、はや此辺木草なく焼たる岩石計りなり、此岩室へ入れハ、先の案内の二人りとも待合せ、其労をねぎらひつゝ、かの二人りの武士の又酒もとめ、我と共に山氣を凌ぎ、我先達の労を謝す、此室に御中道入口といふ文字、四五尺の布に染ぬきてあり、此日も秋暑の甚しけれど、此辺ハはや単の衣にてハたへがたく、強力に持せし綿入各着込仕度と、のへ登り行に、吹おろす風のひようひよつと寒くして、人々の顔さへ青ざめて、其つやなし、時々足を休めつゝ、長丁場を登りやうやく七合目に着ぬ、此岩室にしばし休らへて又登り行、程なくして半鐘の聞へけるを力に、杖さしのべて過行バ、七合五勺目。」

■史料5

小御嶽でしばらく休み、半里ほど元の道を戻ると、登山・下山の分岐点で、その右手の砂道をしばし登ると、五合五勺の砂はたき〔砂振るい〕の茶屋が有ります。ここにも石尊大権現の鳥居があります。ここは七合

五勺の下向道の端にあたります。

ここから更に五勺分登って六合目に至ると、そこからは草木が全くなり、焼けた岩石ばかりの「焼山」です。六合目の岩室には、先の強力の人々が待っていました。その労をねぎ



■小御嶽一之鳥居入口/富士山明細図

らいつつ、2人の武士はまた酒を求め、作者の先達としての労を謝し、酒を酌み交わしています。

岩室には、「御中道入口」という文字を染め抜いた4、5尺の旗が立っています〔1尺=30.3cm〕。

この日も日射しが強「秋暑」でしたが、この辺りは単衣ではとても耐え難く、みな強力に持たせていた綿入れを着込んで仕度を調べ、さらに登ります。山腹を吹き下ろす風が「ひようひよつ」と寒く、人々の顔は青ざめて、艶を失っています。一行は時々休憩をとって長丁場を切り切り、ようやく七合目に到着しました。

この岩室でしばらく休み、また登りはじめると、程なくして、また半鐘の音が聞こえてきました。先の奥脇和男氏の論考では、頂上と共に七合五勺と七合目にも鐘があったことが指摘されています。七合目は過ぎていきますので、どうやらこれは七合五勺の鐘の音でしょうか。半鐘の音は、登山する道者たちを勇気づけていたようです。「半鐘の聞へけるを力に」、一行は金剛状を突きつつ、ようやく七合五勺に到達しました。

(次号につづく)

※『富士の道の記』は新潟大学附属図書館佐野文庫の所蔵です。原文に付されたルビは、煩雑ですがそのままとしました。〕

山頂の鐘(後)

5 大宮村山口の鐘とその後

大宮村山口の頂上の半鐘がいつから設置されたのかは明らかではありません。現在のところ、この鐘について記された最も古いものは、江戸時代の寛政12年(1800)に奉納されたという記録です。(※9)

史料1は、村山口登山道を支配する村山三坊のうちの大鏡坊から、半鐘を奉納した伊勢国大湊(現・三重県伊勢市)の先達にあてて出された文書の控です。「奉納頂上大日如来御宝前」とあるのは、大宮村山口登山道の頂上に建つ大日堂(現在の奥宮)の大日如来に対して奉納されたものであることを示しており、『駿河国新風土記』に記されている半鐘は、あるいはこの時に奉納されたものかもしれません。

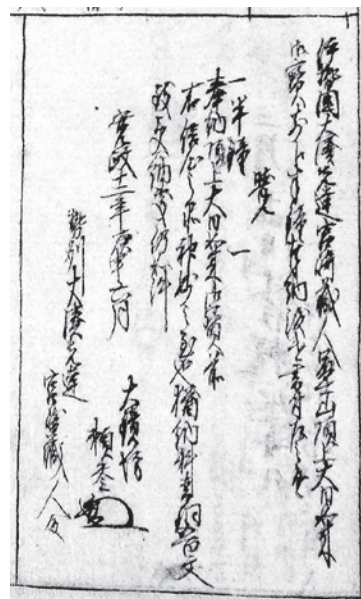
寛政12年は庚申の年で、富士山は庚申年に出現したという縁起に基づいて、60年に一度めぐり来る庚申の年を「富士山庚申御縁年」と称し、御縁年に登山すると特別にご利益があるとして、各地から多くの登山者が押かけました。この半鐘は、60年に一度の御縁年を記念して奉納されたものと思われます。

さて、明治になっても山頂の半鐘は鳴らされていたのでし

覚
一 半鐘 一
奉納頂上大日如来御宝前
右信心之品神妙之至也猶納料青銅五百文
致受納外仍如件
寛政十二年庚申六月 大鏡坊
頼参(花押)

勢州大湊先達

宮崎藏人殿



■史料1「富士山興法寺大鏡坊記録」

うか。明治35年(1902)に撮影された写真に、頂上奥宮の鳥居に巨大な五鈷鈴が下がっている様子が写っています(写真1)。推測ですが、明治初年の神仏分離令の影響による廃仏毀釈運動で、富士山に奉納された仏像の棄却や仏教的な地名が変更されたのに伴い、それまで打ち鳴らされていた半鐘も仏教的なものと判断されて下ろされたものと思われます。五鈷鈴も本来は密教の法具ではありますが、富士

講では道者が登山の際に紐につるして袈裟懸けに身に付けたり、あるいは法会の際に振り鳴らしたりして使用されていた馴染みの深いものです。五鈷鈴は半鐘よりも仏教臭さが多少なりとも薄いと思われたのでしょうか。この大きな五鈷鈴は浅間大社頂上奥宮に明治23年(1890)に奉納されたもので、奥宮の鳥居に吊るされました。鐘懸けに懸かった半鐘と同じように打ち鳴らされたのでしょうか。銘によ

ると、浅間教会山庄元講により明治23年6月に造られ奉納されたものとわかります。浅間教会がどのような宗教団体か明らかではありませんが、神仏分離令から大分過ぎ、廃仏毀釈の運動も落ち着いた明治中期になって奉納されたもので、当時、まだ山頂で半鐘を打ち鳴らしていた記憶が残っていた可能性もあり、その復活を願い奉納したものと思われます。その後、五鈷鈴は鳥居から下され、現在は頂上奥宮の前



■写真1 頂上奥宮の五鈷鈴(明治35年撮影)



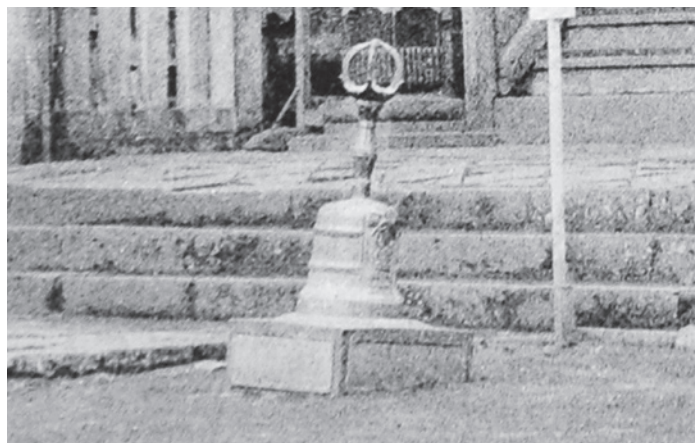
■写真2 現在の五鈷鈴(頂上奥宮)

に置かれています(写真2)。

このように、江戸時代にあった大宮村山口頂上の半鐘は、明治以降取り払われて、代わりに五鈎鈴がある時期までその用をなしていたと考えられます。

ちなみに、吉田口登山道の起点に鎮座する北口本宮富士浅間神社にも巨大な五鈎鈴がありました(写真3)(※10)。一見、頂上奥宮の五鈎鈴と同範のものかと思われましたが、写真を拡大してみると別物であることがわ

かります。ただし、こちらの五鈎鈴は山頂に運ばれたかどうか定かではありません。すでに現物はなく、銘の記録もないので奉納者や奉納時期はわかりません。写真は、大正末期から第二次大戦までの間に撮影されたもので、同じような時期に、富士山の北と南の浅間神社にそれぞれ巨大な五鈎鈴が奉納されていたことは、たいへん興味深いことです。



■写真3 北口本宮富士浅間神社の五鈎鈴(拡大)

6 吉田須走拝所の鐘とその後

江戸時代にあった吉田須走拝所の半鐘が明治以降どうなったのかについては、はっきりしません。吉田須走拝所があったとされる場所は、現在「大日岳」と呼ばれていますが、頂上奥宮ではそこを「成就ヶ岳」と称しています。実はここには20年ほど前まで半鐘が懸かっていて、登山者が打ち鳴らしていたそうです。その半鐘は昭和53年(1978)に栃木県佐野市在住の個人から、それを懸ける鳥居形矢倉と共に奉納されたものでした(写真4)(※11)。また、それより5年前の昭和48

年(1973)に奉納された半鐘もありました(写真5)。銘には「昭和四十八年三月一日」「富士山本宮浅間大社」と刻まれています。明治以降においても何度か奉納され、打ち鳴らされてきた半鐘ですが、現在は東北奥宮の久須志神社に保管されています。昭和53年に奉納された半鐘をみると、胴部が破損して穴が開いています(写真6)。破損をきっかけとして下ろされたのでしょうか。大日岳には半鐘がはずされた鳥居形の鐘懸けだけが今も残っています(写真7)。



■写真5 昭和48年奉納の半鐘



■写真6 昭和53年奉納の半鐘



■写真4 昭和53年に奉納された半鐘と鐘懸け



■写真7 大日岳の鐘懸け

富士山あれこれ

山頂の鐘(後)

7 吉田口七合目の鐘

江戸時代、吉田口には七合五勺の烏帽子岩のほかに、七合目の駒ヶ岳の太子堂にも半鐘がありました。太子堂は聖徳太子を祀った堂で、そこを管理していたのは吉田口の真宗寺院である如来寺でした。如来寺の所蔵する「万延年縁年 如来寺関係雑記録」という文書に太子堂の半鐘の記録があります(※12)。

「富士山七合目駒岳半鐘(中略)銘曰 寄進 願主浄因 新倉渡 辺直七 霊器懸高岳 梵声聞十方 能令迷釀覺 万世利生長 江戸大久保町十三夜講中 同四ツ谷新宕(ママ) 元講中 文化八辛未七月廿三日」

この半鐘は、文化8年(1811)に江戸の大久保町十三夜講中と四ツ谷新宕(ママ) 元講中から奉

納されたもので、鐘銘は「高岳(富士山)に懸けた不思議な力を持つ鐘が発した仏の清らかな声は、全ての衆生に届き迷いから覚めさせ、永遠に仏菩薩が救う」と読むのでしょうか。

そもそも梵鐘は寺院において色々な行事を行うときの合図に、また朝夕には時を伝えるとともに、衆生の愚かしい考えや悪行

を引きとどめることを目的として打ち鳴らされるものでした。さらに、その音色を聞くことによって、地獄の苦しみから逃れ、極楽に往生できるとされたのです(※13)。

おわりに

かつて、仏教を信仰する我が国の人々にとって、地獄を最下層とする六道を永遠に輪廻することは耐えられぬ苦しみでした。

とりわけ地獄に落ちることは最も恐れることであって、それはなんとしても避けなければならないことであり、そのためにはいかに極楽に往生するかが当時に生きる人々にとり最重要課題であったといって過言では

ありません。

富士山の山頂は、古くは密教の八葉九尊の浄土と信仰され、また阿弥陀如来の極楽浄土ともなぞられていました。富士山に登山することは、即ちあの世に赴くことであり、登山する者は誰であっても生身のまま成仏し、また来世は浄土に往生することができると考えられていました。富士山の七合目や山

頂といった聖なる場所、あるいは浄土そのものと認識されていた地で鐘を打つならば、仏に救われることはより確実となり、極楽往生に疑いなしと信ぜられたのでしょう。山頂の鐘は、それを打つ者に極楽往生を約束する鐘だったのです。

(奥脇 和男)

〈註〉

- ※9 「K46 富士山興法寺大鏡坊記録」〔旧大鏡坊富士氏文書(村山浅間神社蔵)〕
- ※10 絵葉書「富士吉田 富士浅間神社本殿」(北口本宮富士浅間神社蔵)
- ※11 『霊峰富士』第10号(昭和54年1月1日発行)富士山本宮浅間大社発行の神社報
- ※12 「万延年縁年 如来寺関係雑記録」〔『新倉の民俗』富士吉田市史編さん室昭和62年(1987)所収〕
- ※13 『仏教美術事典』中村元・久野健監修 東京書籍 平成14年(2002)

〔付記〕

- ・写真1は静岡県富士市の奈木盛雄氏から、写真4・5は富士宮市の富士山本宮浅間大社から提供いただいた。
- ・富士山本宮浅間大社の鈴木雅史氏、富士宮市教育委員会の伊藤昌光氏には貴重なご教示をいただいた。
- ・写真2・6・7は当館学芸員篠原武が撮影した。

富士吉田市歴史民俗博物館 FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY

ご案内

開館時間／午前9:30～午後5:00(午後4:30迄入館可)

休館日／火曜日(祝日を除く)、

祝日の翌日(日曜・祝日を除く)、年末年始

観覧料／大人 300円(団体 240円)

小中高生 150円(団体 120円)

交通案内／●中央自動車道河口湖ICより車で10分

●東富士五湖道路山中湖ICより車で10分

●富士急線富士山駅より山中湖方面バス15分、サンパークふじ下車



博物館附属施設

御師 旧外川家住宅のご案内

〒403-0005

山梨県富士吉田市上吉田3丁目14-8

TEL 0555-22-1101

観覧料／大人 100円(団体 80円)

小中高生 50円(団体 40円)

※博物館・富士山レーダードーム館のチケットで入館できます。

タイトルの「MARUBI」は富士山から流れ出た溶岩台地一帯を指すこの地方のことば「丸尾」からとったもので、丸尾とは溶岩が流れ出る様子の「転び」が転化(変化)したものといわれています。

〒403-0005 山梨県富士吉田市上吉田 2288-1 TEL 0555-24-2411 FAX 0555-24-4665

博物館ホームページ URL ● <http://www.fy-museum.jp> E-mail ● hakubutsu@city.fujiyoshida.lg.jp

2288-1 KAMIYOSHIDA, FUJIYOSHIDA-SHI, YAMANASHI-KEN 〒403-0005 FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY

発行/平成24年3月31日 印刷/K2・ONE